

# 武者小路実篤の「新しき村」

## 「村民」今は3人 次の100年願う



年末のもちつきには、村外から高校生たちも参加した。いずれも埼玉県毛呂山町



野菜を収穫する「村外会員」の和田東市さんは毎日のように村に通う。後方は太陽光発電のパネル

白樺派の作家、武者小路実篤（1885〜1976）が開いた理想郷「新しき村」が大きな転機を迎えている。100年を超えて存続してきたものの、本拠地の「村民」は減り続け、今や3人。再生に向け、新たな挑戦が始まった。

（文 池田 久）

埼玉県毛呂山町の丘陵地に、村はある。現在、40〜70代の男性3人が暮らし、協力しながら無農産で米や茶を栽培している。

村の始まりは第1次世界大戦が終わった1918年。国内では米騒動があり、スペイン風邪が流行していた。そんな不安定な時代に、実篤は仲間と高崎県の山間地を開拓した。一定の労働をすれば衣食住が平等に保証され、自由に余暇を過ごせる。そんな場をめざした。

ダム建設が決まり、39年に現在の場所に移す。当初、村外からの経済支援が欠かされたが、戦後に始めた養鶏事業が成功し、58年に村の事業だけで生活費をまかなえるようになった。60、70年代には若者の入村や出産が相次ぎ、幼稚園もできた。人口は最盛期で60人を超えた。

その後は高齢化と村民の減少が進

## 衣食住保証の農業共同体 存続めざし寄付・アイデア募る

一部では「解散」もささやかれた。100周年を迎えた18年に8人だった村民は、70、80代の5人が昨年春、去った。村を運営する一般財団法人の理事長も務めていた寺島洋さん（81）もその1人だ。村内で結婚し、約60年暮らした。愛着は強いが、村の立て直しを主導することに限界を感じた。「新たな人たちにバトンタッチする時期だ」と思い、決断しました。

寺島さんに代わり、新理事長に就任したのは、村外で暮らす実篤の孫・武者小路知行さん（79）だ。「傍観できない。何とかして存続させたい」と思った。

まず、税制上の優遇措置が厚い「公益財団法人」で村の運営を行うことを打ち出した。認可を受けると寄付が受けやすくなり、節税できる。昨年12月に決めた今年の予算では、公益財団法人への移行を前提に収入の柱に寄付金を据えた。約3千万円を目標とし、2千万円をクラウドファンディングで集めたいという。

資金が集まれば、来訪者が使うトイレを改修したり、空き家や鶏舎を解体したり、老朽化する村の設備を整える

「人間らしく生きる」「自己を生かす」といった武者小路実篤の理念のもとに開かれた農業共同体。埼玉県毛呂山町の本拠地（一部は坂戸市）の面積は約10ha。村で暮らす「村内会員」（3人）と、会費を支払って村を支える「村外会員」（約160人）がいる。村内会員は生活費の負担がなく、毎月3万5千円の支給を受けられる。村内にある美術館は一般公開されている。

### 新理事長は実の孫

ひ。別荘の低送などで収入が減り、財政を安定させようと2010年に始めた太陽光発電が窮乏に拍車をかけた。固定価格買取取り制度が終わり、売電価格が大幅に下がった。



①「新しき村」の全景＝2019年撮影、調布市武者小路実篤記念館提供 ②牛舎跡。村に長期滞在する小島真樹さんらが昨年解体した。今年も解体した施設の解体をさらに進める予定だ

「村はこれまで、新しく関わろうとする人をうまく生かすことができなかった。若い人たちも受け入れ、雰囲気が変わっていくといい」。村で20年以上暮らし、米作りを担う小田切正雄さん（55）は語る。

村の危機は今回に限ったことではない。実篤の難村など何度も困難に直面してきた。この危機も乗り切っていく。理事長の知行さんは1月、村の機関誌にこう記した。

「失敗を恐れず前へ進めてゆきましよう」

「村はこれまで、新しく関わろうとする人をうまく生かすことができなかった。若い人たちも受け入れ、雰囲気が変わっていくといい」。村で20年以上暮らし、米作りを担う小田切正雄さん（55）は語る。

村の危機は今回に限ったことではない。実篤の難村など何度も困難に直面してきた。この危機も乗り切っていく。理事長の知行さんは1月、村の機関誌にこう記した。

「失敗を恐れず前へ進めてゆきましよう」

運営法人の理事で、計画をまとめた弁護士の千賀修一さん（79）は「新たな人材を迎え入れるためにも、時代の変化に合わせる必要がある。実篤の理念を実践してきた村は日本の宝。積極的にアピールしたい」と意気込む。

意向だ。美観アップで、新たな入村者を増やしたいという。懸賞論文も募り、村を存続・発展させる事業のアイデアを集めたいと考えた。

「村はこれまで、新しく関わろうとする人をうまく生かすことができなかった。若い人たちも受け入れ、雰囲気が変わっていくといい」。村で20年以上暮らし、米作りを担う小田切正雄さん（55）は語る。

### 対立の続く時代 見直されてもよい

「新しき村」を2018年に訪ねた政治学者・菱尚中さんの話 白樺派、武者小路実篤

が掲げた理想主義は、近代的な個を尊重しながら、自然と親しみ共に生きていこうと

いうもの。間口が広く、左右のイデオロギーを超えた理念だからこそ、村が100年以上続いてきたのではないか。先細りだとはいえず尊敬に値する。対立の続く今の時代、

再び見直されてもよい。農業を志す若者たちによって、埼玉だけに限らず、「のれん分け」のように広がっていく可能性もある。